

「びわ湖体験学習プログラム」を核とした びわ湖学習の充実に関する一考察

田淵草人・斉藤 陽・岸江彰悟・遠藤修一・川嶋宗継（滋賀大・教育）

1. 研究目的

滋賀県には環境教育に触れる数多くの機会があり、これは環境への意識を高めるためには非常に有意義であると言えるだろう。環境教育において最も重要なことは実際に自らがその環境に触れ、体験してみることであり、それこそが環境への関心・意識を育てる最も効果的な方法であると私たちは考える。本学で長年に亘って行われてきた調査艇によるびわ湖観測を基盤として、遠藤ゼミの面々がそれを実際の体験学習の中で実践を繰り返し、今日の体験学習の形を作り上げた。本研究では、これまでの研究や実践活動の中で浮かび上がってきた課題を整理・追求し、新たな提案をすることで「びわ湖体験学習プログラム」をより充実したものにする 것을目指す。そして、それによってより高い環境マインドを育てることを目的とする。

2. びわ湖体験学習について

「びわ湖体験学習」は本学の調査艇「清流Ⅲ」（9ト、定員24名）に乗船して、びわ湖上で行う体験型の環境学習である。本学の授業として行うのはもちろんのこと、県内外の小・中・高等学校の総合的な学習の時間での授業としての実施、県や市で行われるイベントの一環としての実施、および一般の方にも門戸を開放し幅広く実施している。また、文科省の特色GP「びわ湖から学ぶ環境マインド」の大きな柱としても位置づけられている。その基本的な内容としては、南湖・北湖に各1ヶ所ずつある観測点で行う下記の観測項目が挙げられる。

- ・バケツによる表面水の採水 ・表面水温、電気伝導度、pH測定 ・採水、採泥
- ・透明度測定 ・プランクトン採集、観察 ・クロロテック観測 ・気象観測（船室内）

このような観測を学習者自身が体験し、びわ湖に直接触れることで、びわ湖の現状を知り、環境問題を考えるきっかけになると考える。

3. びわ湖体験学習プログラムの充実についての提案

2007年度に実施した計41回（562名乗船）の「びわ湖体験学習」を通じて得たことや、ゼミ生へのアンケート調査、学生レポートの分析などから、現在の活動を見直し、びわ湖体験学習プログラムをより充実したものにするために以下のような提案を行う。

- ・乗船中のプログラムについての提案
 - ①南湖と北湖の比較ができるような観測態勢 ②プランクトン観察法の工夫
 - ③参加者自らの体験的活動を増やす工夫
- ・事前、事後学習についての提案
 - ①ハンドブックの改訂 ②「びわ湖・瀬田川オブザベトリ」の活用
 - ③ビデオ教材の作成

これらの提案の全てが実現可能かどうかはわからないが、その内のいくつかだけでも継続的に改善に向けて取り組んでいくことで、今後のびわ湖体験学習プログラムが更に発展、充実していくことを望む。以下に、改善の具体例を挙げる。

4. びわ湖体験学習の充実のための具体的な事例

(1) ビデオ教材の作成

事前学習の充実のひとつとして、実際にビデオ教材の作成も行った。このビデオ教材は体験学習実施の前に先に挙げたオブザベトリでの視聴、また様々な学習フィールドで活用できるものである。

今回作成したビデオ教材は二つあり、「楽しく学ぶびわ湖体験学習」と題した作品で本編 14 分のものがひとつ、もうひとつはダイジェストバージョンとして 5 分程度の作品を作成した。体験者がこのビデオを体験学習の前に見ることで、具体的な体験学習のイメージを持った上で乗船するため、より体験学習の理解が深まることを期待している。



調査の風景
(VTR より抜粋)

(2) びわ湖流域に生息する魚を用いた展示教材

2007 年末に改築された本学環境総合研究センター「びわ湖・瀬田川オブザベトリ」を活用する方法のひとつとして、びわ湖流域に生息する魚を展示するという提案がある。生き物という身近な存在を通して、びわ湖に触れる場を提供することは、特に小学生などに対して非常に有効な方法である。これをきっかけにしたびわ湖への興味・関心の高まり、更には自発的な学習意欲の発達に繋がることを期待している。



「地球温暖化防止フェア（草津市主催）」での生き物展示のようす（2007. 10. 6）